子どもの話を聞く場面における教師の習慣的態度が 教師の効力感及びワーク・エンゲイジメントに与える影響

○中尾朋子¹・三宮真智子²・山口洋介²

(¹大阪大学大学院 連合小児発達学研究所・²大阪大学大学院 人間科学研究科)

キーワード：聞く態度、教師効力感、ワーク・エンゲイジメント

Influences of teachers' listening attitude on teacher efficacy and work engagement

Tomoko NAKAO¹, Machiko SANNOMIYA² and Yosuke YAMAGUCHI²

(¹ United Graduate School of Child Development, Osaka University, ² Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Key Words: listening attitude, teacher efficacy, work engagement

問題・目的

厳しい勤務実態や多様化・複雑化する子ども・学校現場の課題を背景とする教員のメンタルヘルスの向上は喫緊の課題である。そこで、注目されるのがワーク・エンゲイジメント（以下WEと表記）である。WEは活力・熱意・没頭の特徴づけられる、仕事に関するポジティブで充実した心理状態と定義づけられる概念である（Schaufeli et al., 2002）。先行研究において、上司・同僚のサポートや仕事の裁量権など、仕事の資源だけでなく、積極的な対処スタイルや自己効力感など個人の資源がWEに影響を与えていることが指摘されている（島津, 2010）。

本研究では、子どもの発話場面における習慣的態度に注目し、子どもの話を聞く場面における教師の習慣的態度が、問題解決志向と教師効力感を媒介し、WEに与える影響について検討することを目的とする。

方法

調査協力者 兵庫県内の公立小学校に勤務する3市8校の教員に留置き法による質問紙調査を依頼し、112名から回答を得られた。回収率は48.28%であった。回答に不備のあるものを除外した結果、92名（男性39名、女性53名）を分析対象とした。年齢は22～63歳であった（ $M=38.21$, $SD=12.04$ ）。有効回答率は40.28%であった。

調査時期 2017年11月上旬から中旬に実施された。

調査内容 (1) 子どもが先生に「話してよかった」「話さなければよかった」エピソードから抽出された教師の態度をもとに、教師に自己評定を求める「子どもの話を聞く場面における教師の習慣的態度」30項目が作成され、「1. 全くあてはまらない」から「6. よくあてはまる」の6件法で回答を求めた。(2) 竹村（2008）の対処行動評価尺度（問題解決志向、情動軽減志向、支援希求志向、各4項目）についてそれぞれ4件法で回答を求めた。(3) 松尾・清水（2007）の小学校教師版自己効力感尺度（生徒指導、教師理解、生徒理解、各4項目）についてそれぞれ5件法で求めた。なお、「生徒」の表記を「児童」に変えて使用した。(4) Shimazu et al. (2008) のユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度（UWES）日本語短縮版（活力、熱意、没頭、各3項目）についてそれぞれ7件法で回答を求めた。

結果と考察

子どもの話を聞く場面における教師の習慣的態度、問題対処評価尺度、教師効力感がWEに与える影響仮定モデルを、相関と予備調査を考慮して構成し、Amos 24.0.0を用いた最尤推定法による構造方程式モデリングによって検討した。モデルの解釈可能性と適合度検定の結果を検討し、図1のモデルを採用した。なお、問題解決志向と教師効力感の各項目の誤差の表記は省略した。

図1 子どもの話を聞く教師の習慣的態度がWEに与える影響仮定モデル

「話を聞きながら、その子のよさや特性を見つけるよう常に気をつけている」「どれだけ忙しくても、子どもの話を聞く時間を作っている」などからなる「受容・尊重姿勢」からは、「児童理解効力感」「教師理解効力感」「問題解決志向」へのパスが確認された。また「問題解決志向」からは「児童理解効力感」へのパスも確認され、媒介している可能性が示された。「児童理解効力感」からは、全てのUWESの下位因子へのパスが確認され、「活力」「熱意」「没頭」のいずれも有意に高い値を示していた。同僚や保護者から自身が理解され、信頼されているという内容の「教師理解効力感」からは「熱意」へのパス係数が有意傾向であり、「児童指導効力感」からは「活力」へは有意、「熱意」へは有意傾向のパスが確認された。

「深刻そうな話しぶりだが、大したことはないと思うことがある」などから構成される「軽視・回避傾向」からは「児童理解効力感」へ、「子どもが怒りや不満を率直に表出すると戸惑う」などから構成される「感情対処不全傾向」は「児童理解効力感」「教師理解効力感」「問題解決志向」へ、いずれも負のパスが確認された。

これらの結果から、個に応じ、受容的・積極的な聞き方を習慣にしている教師は、主に「問題解決志向」と「児童理解効力感」を媒介して、WEを高めている可能性が示唆された。

引用文献

- 松尾一絵・清水安夫（2007）。「小学校教師版自己効力感尺度の開発」－教師の個人的属性による比較検討－ 応用教育心理学研究, 24, 11-17.
- Shimazu, A. et al. (2008). Work engagement in Japan: Validation of the Japanese version of the Utrecht Work Engagement Scale. *International Association of Applied Psychology*, 57, 510-523.
- 竹村洋子（2008）。「問題行動」を示す児童とのかかわりに対する教師の評価に関する検討 教育心理学研究, 56, 44-56.